

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02639

研究課題名（和文）仏教・道教が山水詩の確立に与えた影響に関する研究

研究課題名（英文）Study of the influence of Buddhism and Taoism on the establishment of Chinese Nature Poems

研究代表者

堂蘭 淑子（DOZONO, Yoshiko）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80514330

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：中国叙景詩の発展過程を明らかにする一環として、本研究は謝靈運の山水詩と当時の仏教界の指導者であった慧遠らの作品との関わりを検討し、謝靈運の二首の山水詩がどのように慧遠「仏影銘」の法身の思想、及びその表現の影響を受けたかを明らかにした。謝靈運の詩はその時々風景の中に超越的存在の気配を探り、それとの交感を求め、さらに交感を達成できない苦しみをも表現したものとして、山水詩上重要な意味を持っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、慧遠晩年の法身観を探るという思想史的観点から専ら研究されてきた慧遠「仏影銘」について、文学的見地を交えて謝靈運文学との共時的関係性を考察したものである。当時の文学と宗教との関係を個々の表現に即して明らかにすることによって、山水が画一的なものではなく、個々の場面において異なる世界を構築するものであると認識され、山水詩として表現されるに至る過程の一端を示した。

研究成果の概要（英文）：As part of clarifying the development process of Chinese Nature Poems, this study examined the connection between Xie Lingyun's nature poems and the works of Buddhists included Huiyuan, who was a leader in the Buddhist community at the time, and revealed how the two nature poems of Xie Lingyun were influenced by Huiyuan's idea of the Dharma-body and its expression in the "Foying-ming 佛影銘". Xie Lingyun's poems are important as nature poems in that they give expression to the anguish of searching for intimations of a transcendental entity in one's natural surroundings, seeking communion with that entity, and being unable to achieve it.

研究分野：中国魏晋南北朝文学

キーワード：謝靈運 山水詩 廬山慧遠 仏影銘 法身 賞 顔延之 達性論論争

1. 研究開始当初の背景

山水詩が確立した魏晉南北朝期の仏教に関しては、これまでに多くの研究の蓄積がある。基礎文献の訳注では、東晋期の仏教界の指導者であった廬山慧遠の著作に詳細な注釈を施した木村英一編『慧遠研究 遺文篇』(創文社、1960)や、慧皎『高僧伝』の訳注である吉川忠夫・船山徹訳『高僧伝』(岩波書店、2009-2010)等があり、また文学研究の立場から山水詩と仏教、或いは謝靈運と仏教との関わりを論じたものとしては、矢淵孝良「謝靈運山水詩の背景 始寧時代の作品を中心に」(『東方学報』56、1984)や衣川賢次「謝靈運山水詩論 山水のなかの体験と詩」(『日本中国学会報』36、1984)などが本研究に大きな影響を与えている。近年では佐竹保子氏が、慧遠や宗炳など同時代の仏教関連著作との関係も考察した謝靈運山水詩論を発表している(「謝靈運詩文中の「賞」和「情」以「情用賞為美」句的解釈為線索」蔡瑜編『迴向自然的詩学』国立台湾大学出版中心、2012。「李善注「事無高翫、而情之所賞、即以為美」考 謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」詩の「情」の解釈に関わって」『集刊東洋学』101、2009など)。

一方魏晉南北朝期の道教に関しては、訳注として『真誥研究 訳注篇』(京都大学人文科学研究所、2000)があり、研究書としても吉川忠夫編『中国古道教史研究』(同朋舎出版、1992)や神塚淑子『六朝道教思想の研究』(創文社、1999)等の研究蓄積があるが、この時期の文学と道教との関わりを詳細に論じた研究は少なく、趙益『六朝南方神仙道教与文学』(上海古籍出版社、2006)など一部に限られてきた。そのような中、研究代表者は「有待」「無待」という当時頻用された『莊子』由来の語の分析を通じて、謝靈運文学と上清派道教との関わりを考察し、「謝靈運の文学と真誥」(『日本中国学会報』68、2016)にまとめた。今回の研究は、この論文で得た知見をもとに、仏教・道教の諸思想とその表現が複雑に交錯している謝靈運山水詩の特性を明らかにすべく、企図したものである。

2. 研究の目的

唐代に一つの成熟を見た中国自然詩の発展を考えると、謝靈運による山水詩の確立は一つの画期と言えるが、それは山水が個々の場において異なる世界を構築するとの認識に基づき、自身の精神の反映としての山水を表現し得たからである。山水描写はそこに世界の普遍的原理が現れているという思想のもとに発展したものであるが、個々の精神の反映としての山水が描かれるには、仏教の法身説や、心のあり方を鋭く追究した上清派道教など、当時展開された新しい思想の影響があったのではないか。本研究はこの仮説に基づき、仏教・道教との接触が多かった謝靈運の文学を中心に考察を進めることにした。

仏教の法身説について言えば、東晋期は鳩摩羅什と慧遠の交流を通じて法身に関する理解が深まり、二種法身説が進展しつつあったことが明らかにされている(船山徹「六朝時代における菩薩戒の受容過程」『東方学報』67、1995)。法身に関する理解を深め、仏影の造営に新たな意義を見いだした慧遠最晩年の考え方が、謝靈運の山水詩に与えた影響を明らかにし、またそれによって謝靈運のいくつかの山水詩について、新しい解釈を提起することが研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)廬山慧遠の最晩年の著作である「仏影銘」について、謝靈運山水詩との関わりを詳細に分析した。特に謝靈運山水詩を特徴付ける「賞」という語について、廬山慧遠の「仏影銘」における「賞」の用例と比較分析し、当時発展しつつあった法身説が謝靈運山水詩に与えた影響について考察を加えた。「仏影銘」を中心とする慧遠晩年の法身理解については、志村良治「慧遠における法身の理解」(金谷治編『中国における人間性の探究』創文社、1983)や曹虹『慧遠評伝』(南京大学出版社、2002)、村田みお「仏教図像と山水画 廬山慧遠「仏影銘」と宗炳「画山水序」をめぐって」(『中国思想史研究』29、2009)、史経鵬『從法身至仏性 廬山慧遠与道生思想研究』(人民出版社、2016)等の研究がある。本研究ではこれらを踏まえた上で、慧遠「仏影銘」で使われている「賞」の語と法身説・感応思想との関わりを考察し、謝靈運山水詩の「賞」を読み解く手がかりとした。

(2)作家であり中国文学研究者でもあった高橋和巳の顔延之論二篇(「顔延之と謝靈運」修士論文、1956。「顔延之の文学」『立命館文学』180、1960)を踏まえて、晋宋期の代表的文学者として「顔・謝」と併称された顔延之と謝靈運を比較した。顔延之が仏教擁護のために書いた「達性論」関連著作と、謝靈運が仏教の頓悟説の優位を主張した「弁宗論」、さらに両者が相手に贈った贈答詩をそれぞれ比較することによって、詩と文の両面から両者の思想的特徴と表現の傾向について考察を加えた。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の二点である。

(1)慧遠と謝靈運の「仏影銘并序」、及び謝靈運の山水詩「入華子崗是麻源第三谷」「從斤竹澗越嶺溪行」の関係性の考察

この研究では、慧遠「仏影銘并序」とそれを受けて書かれた謝靈運の「仏影銘并序」、および謝靈運の山水詩が、思想・表現上どのように関わっているかを検討した。慧遠の最晩年の著作である「仏影銘并序」は、自身が造営した廬山仏影窟の意義を述べるにあたり、まず「法身」について解き明かしている。法身には、真法身としての「独発」のありようと変化身としての「相待」のありようがあり、さらにその二つは一体不可分であると述べ、後代の二種法身説に近い発展的な法身観を示している。また人々を導くよりどころとして「筌寄」と「冥寄」を挙げ、仏の応現の跡である「筌寄」は誰にとっても身近な手段であるのに対し、ひそやかな導きである「冥寄」は法身に通じる無形のよりどころであり、色身に囚われない真の悟りをもたらすものとしてその意義を強調している。そのうえで、仏影は一般的な仏像と同じ「筌寄」としての役割を果たすだけでなく、近づくと見えなくなるという特殊な形状と山中洞窟特有の趣とを併せ持つことによって、絶対無分別の境地へと我々を導く「冥寄」ともなり得ると主張した。

廬山の仏影に対しては、謝靈運も「仏影銘并序」を書いている。彼が重点的に描いたのは、仏影特有の見え方と仏影窟の存する場の趣である。この銘では、仏身という「形声」を超えたところにもさらに観るべきものがあると説かれ、有形と無形のはざまにある仏影の髣髴たるありさまが丹念に描かれている。このことから、仏影は色身に囚われない境地へと我々を導くという慧遠の趣旨を、謝靈運は十分踏まえて銘を書いたと考えられる。

謝靈運の代表的な山水詩である「入華子崗是麻源第三谷」と「從斤竹澗越嶺溪行」は、慧遠が「仏影銘」の中で表現した「冥賞」、すなわち靈地で「冥寄」を賞して解脱すること、を実際に試みた体験を詠ったものと考えられる。「入華子崗是麻源第三谷」は、仙人華子期ゆかりの地で彼の面影を探したものの全く捉えられなかったことを描く。この詩は、同時期の廬山諸道人「遊石門詩并序」と同様に、古の超越的存在の気配を今ここで捉えることによって古今は通じあう、という信念を背景として制作されているが、末尾では今まで堅持してきたこの信念を放棄することが述べられ、投げやりな心情が詠われている。もう一首の「從斤竹澗越嶺溪行」は、つる草を身にまとった無形の「山阿人」を山中で想見した体験を詠ったものである。その山霊と交わろうとしたものの「賞」(交感)は実現できず、苦しみだけがわだかまったことを詠う。この両詩は、山水遊覧が精神の解放をもたらすことを単純に詠うものではなく、その時々風景の中に超越的存在の気配を探り、それとの交感を求め、さらに交感を達成できない苦しみをも表現したものとして、山水詩上重要な意味を持つものである。

本研究は、慧遠晩年の法身観を探るという思想史的観点からのみ専ら研究されてきた慧遠「仏影銘」について、文学的見地を交えて謝靈運文学との共時的関係性を考察したものとして意義があり、解釈が定まっていない謝靈運山水詩の新たな読みにつながることを期待される。(2019年発表論文)

(2) 顔延之と謝靈運の仏教関連著作、および両者間の贈答詩の比較

この研究では、高橋和巳の顔延之論をふまえつつ、顔延之が仏教擁護の立場から何承天「達性論」に反駁を加えた関連著作、及び「庭誥」について考察を加え、また謝靈運の仏教著作「弁宗論」等と比較することにより、両者の立論の態度や思想的方向性には大きな隔たりがあることを明らかにした。さらに両者間の贈答詩である謝靈運「還旧園作見顔范二中書」詩と顔延之「和謝監靈運」詩の構成や表現的特徴を分析し、自己主張やメッセージ性の強さが際立つ謝靈運に対し、構成の緻密さや網羅性に重きを置く顔延之、という対比が詩にも同様に認められることを示した。(2018年発表論文)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 堂園淑子	4. 巻 92
2. 論文標題 慧遠「仏影銘」と謝靈運の山水詩 両者の「仏影銘并序」、及び謝詩「入華子崗是麻源第三谷」「從斤竹澗越嶺溪行」をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都大学『中国文学報』	6. 最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堂園淑子	4. 巻 8
2. 論文標題 顔延之の詩文に対する一考察 高橋和巳の顔延之論を踏まえて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 桃の会論集	6. 最初と最後の頁 59-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 堂園淑子
2. 発表標題 慧遠「佛影銘」と謝靈運の山水詩 謝靈運「佛影銘」及び「入華子崗是麻源第三谷」「從斤竹澗越嶺溪行」詩との関わりを中心に
3. 学会等名 桃の会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	渡邊 登紀 (WATANABE Toki)		